おちほ

第17号　平成２年９月10日　発行　社会福祉法人　椎の木会　落穂寮　発行者　増田　正司

山あいに響く声

杉山のお祭り

去る五月三日に、四月よりスタートした〝杉山の家〟の祭りを、増田寮長をはじめ、池谷副寮長、親の会より赤井さんをはじめ寮生保護者、生活ホームの皆さん、来賓の方々を招き、杉山の家作業班十二名を囲み、行われました。

祭りでは、八幡・八坂神社でのお祓いを、皆、神妙な面持ちで手を合わせて、杉山の家の繁栄を願った後、鳳凰を乗せたおみこしを寮生らが「わっしょい、わっしょい」のかけ声に合わせ、天高く飛べと力強く担ぎ、杉山の家の祭りを盛り上げました。

まだまだ誕生したばかりの杉山の家。これからどの様に歩んでいくのか、私達にとって不安でもありますが、又、非常に大きな期待・希望ともなって進んでいって欲しいと思っております。

故本田先生の意志を引き継ぎ、職員一同で、杉山の家に取り組む決意をひとつにしたお祭りでありました。

本田憲生君を悼む

増田正司

落穂寮を代表し、謹んで故本田憲生先生の御霊に申し上げます。

先生が亡くなられて8旬が過ぎましたが、まだ元気な姿で現れるのではないかと思うのです。余りにも突然のお別れでいまだに信ずることができません。亡くなられた日が遠のけば遠のく程身近なところからひょっと出てきそうな気がしてなりません。お別れが夢であってほしいとどれだけ考えたかわかりません。

あなたが大谷大学の紹介で、面接の日に真新しい背広姿でさっそうとあらわれた時を思い出します。新進気鋭の青年が加勢に来てくれたと大喜びしたのです。寮内に新風をふき込んで活気にあふれていく様子が見えてきました。子供を愛する先生の回りにはいつも子供たちがまつわり付いてとても楽しく賑やかな明るい潮が巻いていました。

落穂寮が大津から石部に移ってからの10年間は文字どおり環境整備に明け暮れした毎日でした。その間に大変な力量を発揮して今日見られる緑豊かな台状を作り上げてくれました。木を愛し、花を愛し、自然を慈しむ心の持ち主にしてなしえたことをひとしおに感嘆敬意の思いでした。

移転の当初に、施設が地域にとけこんでいくことは言うほどやさしくはありません。天性の陽気で社交的なあなたは、いつの間にやら村の若者や年寄りと仲良くなり、又信頼されて寮と村の橋渡し役を動めてくれました。

あなたの目に見えない励みの数々が寮の運営や寮の子供たちの幸せにどれだけ貢献したか図りしる事ができません。寮の生活が続く限りその恩恵に浴していること、あなたが生き続けていることを実感して参ります。

年長寮生の問題を解決するために開設された「落穂寮杉山の家」の専任職員に選ばれ、寮内の与望を担って赴任し二旬を過ぎ、野や山に親しんだ経験を生かし将来構想実現に向かった直後の急逝で、あなたにとって返すも口惜しく残念の窮みと察するものであります。

あなたの志を継ぎ、あなたの足跡を振り返りながら構想実現に向け進して参りたいと考えております。

本田先生、これからも寮のために力を貸して下さい。

長い間お疲れ様でした、どうぞ安らかにお眠り下さい。おわかれします、さようなら。

（90・6・21）

故本田憲生先生（享年49歳）

故本田憲生先生は、一九四一年（昭和16年）一月兵庫県生れ、大谷大学文学部教育哲学科卒業後、一九六六年（昭和41年）四月落穂寮に就職しました。依頼24年間、知恵遅れの子供たちと共に歩んだ一生でありました。特に機能訓練の分野では数多くの業績を修め、研修会等でもその成果を発表しておりました。また長年学習主任として、寮生の療育にあたっておりました。

今年度より、寮が新たに取り組んでいる今津町の「杉山の家」の運営と指導とを任されました。文字通り子供たちと寝食をともにし、作業に明け暮れる毎日の中「杉山の家」での生活の流れもできはじめ、いよいよこれから…、というときの四月二十七日、急性心不全による突然の死でありました。

さようなら　本田憲生先生

荒木　元（友人）

追悼する会開かれる

六月二一日、故本田先生を追悼する会が落穂寮内で開かれ、沢山の方が惨烈して下さいました。会では県障害福祉課の吉水氏、県社会福祉協議会の松井氏らの追悼の言葉をいただき、本田先生の在職中のビデオの上映で、在りし日の姿を慕びました。

平成2年4月26日夜、「杉山の家」にいる彼に電話。

「先生、今津の農協の役員の人とコンタクト取れましたよ。」

「おおそうか。それは良かった。また何かと世話にならんならんしな。」

「先生、今度の連休の予定教えてや。一回「杉山の家」へ行きたいしな。」

「明日の夜から、家へ帰るさかい、ゆっくり話しよう。……ああ、忘れとった、竹の子、いっぱいあるねん。持って帰えるさかい取りに来いな。」

電話嫌いな彼とのいつもの様な短かい会話。翌27日、その夜はプリンスホテルの開業記念の花火が大津の夜空に大輪の花を咲かせていた。花火が終わった直後、不意に電話のベルが鳴った。

「あっ、そうや、本田先生の所へ電話するの忘れてた」

そう言いつつ受話器を取った。

「おじちゃん、私、瑞穂。お父さんの様子、おかしいねん。身体は冷たいし、息したあらへんみたいやねん。……」と

本田先生の長女の涙声が頭をガーンと打った。

「何。息したはらへんて……お母さんどないしてるねん。……救急車、呼んだか。」

「うん、呼んだ。おじちゃん早よ家へ来て。」

「よっしゃ、すぐ行く。」

今年もまた、私の住んでいる商店街のアーケードの柱に、近くの保育園・幼稚園児の作った色とりどりの七夕の笹飾りが並んでいる。

昭和四十二年七月某日。当時、大津市南郷にあった落穂寮の二階の講堂。子供達の作った七夕の笹飾りの中、中央の瓶上に、その当時長髪が全盛なのに、丸坊主、黒縁の眼鏡、黒いジャージ姿の青年が、大きな声で、子供達に話しかけていた。みんなはてんで話を聞いていない様子だったが、彼は話を続けていた。これが私の、彼と落穂の子供達との最初の出逢いだった。

彼の葬儀が終って、彼が「杉山の家」から乗って帰って来た車の中を整理していて、ふと気付いてトランクを開けると、約束の「竹の子」が、いっぱい詰っていた。

遺稿

重度児の療育

―実感の生活を求めて―

本田憲生

9月9日から11日にかけて、全国精神薄弱施設職員研究大会が福井県で開催され、近畿愛護児童部会の関係から、当寮が ― 重度児の療育 ― というテーマにそって〝実感の生活を求めて〟の題で発表を行ったものである。

児童生活施設の当寮も、年齢超過児の滞留現象が深刻な問題である。定員80名。現員77名中、約5割の37名が18才以上という状況で、今後毎年3～4人がその中へ入っていくことになる。昭和25年の設立当初から、重度児優先の生活施設として門戸を開いてきたことに起因するところもある。県内はもとより、他の都道府県からの受け入れもあり、永年にわたって重度児との生活実践の積み重ねが、今日、県内の重度・最重度のこどもたちの生活施設として評価をうけていると考えられる。

それでは寮全体が「実感の生活」をテーマに取り組み、生活をよりゆたかに創造する実践を以下に三例挙げる。

(1) 機能訓練と体育活動

これは身体面、精神面の相方を鍛えるという点で、ランニングを中心に、小運動、感覚系の運動を含めたものであり、指導上の原則として、毎日実施すること。実施時間が30分以上であること。心拍数が平常の二倍ぐらいになること。などがそれである。しかし、これは単調な運動であるので、確かな目標をもち、目的をもって取り組むことで、実践の連続と、技術の向上を図ることが重要である。蓄積された体力・技能・技術は、変化のあるもの、集団的に、また競技として参加する方向づけへ進めることが肝心である。従来取り上げたものでは、富士山及び比良登山、びわこ周歩、ABC篠山マラソン大会、日本スペシャルオリンピック(サッカー、陸上競技)等の参加がある。

(2) 造形・表現活動

これは焼き物、絵画、木工等が活動の中心で、情緒のゆたかな育成と安定がそのねらいである。この活動は寮生にとってはその時々の発露という、全く自由な表現である。時には創造と破壊が同時に繰り返され、それが絶えず安定の方向として生れてくるようである。最も大切な点は結果としての作品の評価ではなく、その過程において、個人の心理面がどう働いたか、それをどう表現していったかを見ることである。幸い寮生の作品はその道の専門家にも認められて久しく、東京・京都・大阪・名古屋、そして県内と、美術館や画廊等で展示会を開き、社会の関心をえており、一方、寮生にとっても生きる証となっている。同時に彼等への理解と啓蒙にも大いに役立っているものと考えている。

(3) 生活環境づくり活動

これは豊かな生活づくりというか、潤いのある環境づくりを目指した活動で、内容としては整備作業が中心で、除草、道路補修、樹木の管理、園芸等、一年を通じて十分過ぎる量の活動である。寮が現在地に移転して17年が経過した。建物以外の施設整備は全くの手づくりといえる。この間、護岸ブロック積み、土堤の側面の土場打ち、側溝の敷設、植樹祭と寮一丸になって取り組んできた。これが今日の生活環境づくりの土台である。これらの活動を通して、ここが自分たちの生活の場であるという気持ちを育ててくれたと考えており、今後もこうした活動の中から、充実した毎日を寮生と実感して生きたいと考えている。

以上、ここに述べた内容は、あまりにも日常茶飯的で取りとめのないものであったかと思う。しかし今日最も考えられるべき重度児の療育が、ややもすれば生活技術獲得に終始して、「心」を豊かなものにするという方向を見失い、生活が貧しく思えてならない。障害児を持つ親たちは、この子どもたちの心をはぐくんでくれる生活の場を求め、施設を見ているはずである。

最近短期療育事業をはじめ、緊急一時保護事業、あるいは滋賀県自閉症児親の会や在宅障害児団体との運動会や、療育キャンプ等の交流事業を行う時、社会の当寮に対する期待の大きいことを痛感し、より一層、寮生の生活の充実を図りたいと考え、ここに述べた。

【本稿は昭和62年、第25回全国精神薄弱施設職員研究大会福井大会で発表された内容を元に書き下ろされたものです。本田先生の遺稿として掲載いたしました。】

さわやかな休日を

ボランティア美容奉仕『ちぇすまん』さん

約二年前から石部と甲西にお店のある美容室「ちぇすまん」さんが美容奉仕で来寮して下さっています。現在は毎月第四月曜日に来て、主にC棟の女の子の髪をカットしてくれています。いつも来て下さるのは園恵子先生、奥村正人さん、それにお店の若い人が交替で来て下さいますが、七月二三日に来て下さったのは先生の娘さんの園史さんでした。そもそものきっかけなどをお聞きしました。

「一月一回、さわやかな休日を過ごそうと思い、何かボランティアなど探していたところ、寮の秋岡先生から話を聞き始めました。……(美談でしょう笑)

・子ども達の第一印象はどうでしたか。

「お店に来てくれてる子は結構しっかりしてらっしゃるから……正直言って、来てみてびっくりして、胸が苦しいような、とにかくいっぱいになりました。」

・現在はどうですか。

「子どもが楽しみに待っててくれるので、私たちの方も楽しみにしています。今日も拍手で迎えてくれたんですよ。」(園恵子先生)

「はじめ嫌がってた子も何回かやっているうちに慣れていってちゃんとやらせてくれるようになるし、出来た時の喜びもまたひとしおですね」(奥村正人さん)

「お店で会った子が憶えててくれて、来るのが楽しみです」(史さん)

とのこと。

「これからも続けられる限り来ます」と力強い。

ピン止めを取る子、いたずらする子、逃げ出す子……これからも厄介な寮生の髪を美しく女性らしく仕立てていただけたら、と思います。長いお付き合いをよろしくお願いいたします。

本田先生の時計

運動場の端、プールのフェンスの所に背の高い時計が備え付けられました。

これは、故本田先生によせられた御香典の一部を奥様である真樹子さんが寮に寄付されたもので備え付けたものであります。運動場の何処にいても見えるような大きな立派な時計で、朝のランニングの時や運動会の時も本田先生がそこにいて叱咤激励してくれているようです。ソフトボールでのホームランも決してここに向けては打たないようにしましょう。

新職員紹介

「杉山担当に決って」

B棟指導員　山根孝之

今年度採用して頂きました、B棟杉山担当の山根孝之です。私の様な弱輩者が今、杉山の事業に参加させて頂いている事、非常に嬉しく思います。私が最初に杉山の件についてお話を伺ったのは昨年の秋でしたが、初めは、何とも夢のある話であるなあと、唯々感動するばかりであった私も、いざ行くとなると夢だけでなく現実が頭を過ったのも確かです。しかし、次の話はそんな私を大いに励ましてくれました。ナイアガラの滝を見たスタインベックは、本当に良かったといい、こう続けます。「良かった。というのは、今後ナイアガラの滝を見たことがあるかと問われても、見たと本当のことがいえるからだ。」

「これからの課題」

A棟保母　立入路子

初めまして、この春A棟保母新任となりました立入路子です。仕事が始まって一カ月が過ぎ、少しづつ棟の雰囲気には慣れてきたしたが、まだまだ戸惑うことで一杯の毎日です。

私が初めて落穂寮に来たのは、昨年の夏でした。短大の先生の勧めで実習させて頂くことになり、その時初めて精神薄弱児と呼ばれる子供達と生活を共にしました。転んで汗や泥まみれになっても、泣いたり笑ったり、一生懸命生きている子供達を見て、胸を打たれるものがありました。〝自分に何ができるのか〟まだまだわかりませんが、子供達の為に、子供達と共に、そして子供達に負けないように、チャレンジ精神でがんばりたいです。よろしくお願いします。

「夏に向かって」

A棟保母　野田はるみ

はじめまして。野田はるみです。同期の中では一番チビでどんぐり頭の私です。ここの面接に来た時「他人にはできない特技はありますか？」と聞かれ、「遠泳です。」と答えただけに、夏は大好きで、その夏に向けてはりきっています。

今はまだバタバタしているばかりで、ふと気がつくと(何でこんな怖い顔をしておこってばかりいるんだろう。)と、落ち込むこともしばしばです。けれどほんの小さなことで笑えたり、子どもの純すいさで元気づけられたり、これからの生活に希望を感じられたり、そういうことがある限り私はここでがんばれるでしょう。晴れた太陽の下で、元気に子ども共々成長できたら幸せだと思います。

「近くて遠かった落穂で」

B棟保母　青木博子

今年の春、短大を卒業して落穂寮に就職しました。家が石部で、小さい頃から落穂の子供達と身近な所で生活してきました。小学校からの帰り道、子供達が散歩しているのとすれ違い、下を向いて目を合わせないようにして歩いていたのを覚えています。

その頃は、まだ何もわからず、近くで生活しているとはいえ、実際には、私と落穂の子供達とは交流がなく、遠い存在だったように思います。

落穂寮に来て、子供達との毎日の悪戦苦闘で、少しずつ、本当の子供達の姿が、わかりかけてきました。これからも悪戦苦闘が続くと思いますが一生懸命頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

「夢が叶って」

B棟保母　鶴岡里恵

生まれは山口県の都濃郡という人口五千人の小さな町です。そこには、知恵遅れの子ども施設があり、私は施設というものを知りながら大きくなりました。そしていつしか施設保母になれたらと思うようになり、今こうして夢が叶ったというわけです。

この職業が私に向いているかど

うかと言えば、性格上向いていないような気がします。二ケ月経っても失敗ばかりで、自分のいい加減な性格を思い知らされている毎日です。これから子ども達と過ごす中で自分をいい方向に変えていきたいと思っています。

私はこの仕事に必要なのは包容力だと思っています。これから子どもを少しずつ愛していく中で、ゼロに等しい私の包容力を増やしていけたらと思っています。

「がんばります」

C棟保母　**満倉輝美**

はじめまして。今年C棟に入りました満倉です。では、まず自己PRを。

私は、絵と音楽が好きで、今は油絵とフルートをやっています。そして、今ここに来て良かったと思っています。

精神薄弱児の施設に行きたいと思ったのは、専門学校に入ってからですが、それまではずっと、障害児の施設で働きたいというのが夢でした。その念願もかない、今は子ども達と一体になった生活を、又お姉さん、お母さんのような存在になりたいです。

まだ、右も左もわかりませんが、これからもがんばっていきたいと思います。がんばります。

「初心に戻って」

千早正明（ちはやただあきら）

この六月五日付で落穂寮において、生活をさせて頂くこととなりました。新任と申しましても、とうの立ちはじめた年頃ですので、寮の皆々様に多大なご迷惑をお掛けすると思います。

ハンディーを持たれた方々とは十年以上ごいっしょに生活を共にしてまいりましたが、知的にハンディーがある方々との生活は短かいですので、一から出発するという心構えで、生活をさせて頂きたいと思っております。

寮生さんたちの「笑顔」と「寝顔」に接するのが、たまらない魅力です。

皆々様のご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

＊千早先生は九月より杉山の家専従の職員に任命されました。

新入寮児紹介

矢部尚志くん

食べることと、坂田陽司君が大好きな矢部ちゃんです。坂田君にいくらたたかれても後をついて行き、いつもニコニコ笑っています。

土佐大介君

大介君は目がとってもきれいで、笑顔の似合うかっこいい男の子です。ブランコ、自転車、おやつが太好きです。落穂寮のことも好きになってくれたらなあ。

尾崎洋介君

落穂寮に来たばかりの頃は〝マロ〟と呼ばれスローペースの洋介君でしたが、今では自分で御飯のおかわりにいく積極的な場面も見られ、寮の生活にも慣れてきました。

船津市子さん

小柄でまだ幼さの残っている市子さん。実は、今年高等部一年生です。きょとんとした顔と驚き顔がチャームポイントです。誰にでも付いて行く癖を直さなければ…。

『杉山だより』

山根孝之

杉山での生活が始まって、はや3カ月が過ぎようとしています。初めの1・2カ月は、次々とでてくる仕事に追われる毎日でしたが、最近では、仕事を楽しむ余裕さえ出てきました。今現在、畑も3面でき、収穫した作物もいくらかあったりし、順調に進んではいるのですが、寮生の仕事として畑を捉える場合、苗と雑草の区別がつかず、全て引き抜いてしまったり、また、畝を踏んでしまったりする者が多く、多少、大変ではあります。しかし、畑以外の雑木及び一輪車による運搬など、運搬作業に於ては皆、大変良く頑張ってくれる為、仕事としての効率は畑を上回ります。ですから、今後の取り組みの中に、いかに運搬作業を取り入れるか、言い変えれば、運搬作業がメインとなる取り組みを探さなければならないという事です。その一つとして、炭焼きはどうかということで、近々取り組んでいきたいという方向で杉山が動いています。炭焼きという作業には、やはり、木の切り出し、運搬、この二つが非常に大きなウェイトを占めてくるものですから、寮生の活躍の場が出来るのではないかと期待していますし、またこの炭焼き窯を利用して、寮生の作る土偶を焼いてみては、などと夢は膨らみます。その他にも杉山はまだまだ、色んな可能性を秘めているでしょうし、今後それがどういった形で出てくるか、その展開が非常に楽しみです。

杉山の事業自体は道無き道を進むという感が否めませんが、道が人間を広めるのではなく、人間こそ道を広めることができると信じて杉山の事業に取り組んでいきたいと思いますので、御父兄の方々他、今後も何かと御協力頂かなくてはならないことが多いかと思いますが、よろしくお願い致します。

水源地で一服

杉山の家の日誌

8月6日(月)

杉山の家の水源地にある給水管の取り替え工事をしました。水源地は家から国道を渡り、約五〇〇m程分け入った山の中。ワークキャンプで参加して下さった東京練馬の特殊学級の先生方、信楽学園長北村信雄先生以下職員の皆さんなど総勢20名近くの参加を見ました。水源地では皆膝まで水に浸りながらの大奮闘。同時に山道の整備もしたので行き帰が大変楽になりました。夜は懇親会で各々遅くまで語り合いました。

8月9日(木)

今津主催の障害者ふれあいサマーキャンプに参加しました。魚つかみにバーベキュー、キャンプファイヤーで楽しみました。来年も呼んでくれるかな。楽しみです。♪

泉

▼故本田憲生先生遺児育英資金の募金に沢山の方々からご協力をいただき有難うございました。過日皆さんよりのご厚志を未亡人の本田真樹子さんにお渡しいたしました。心から厚くお礼申し上げます。

▼夜、仕事を終え歓談している所へ突然届いた本田先生の訃報は急には信じられるものではありませんでした。「……だって、今日一緒に杉山から帰って来たんですよ!!」

▼机に向かいこの原稿を書いていると、突然「プンッ」と印度土産の弦楽器の玩具が音を立てました。何でだろうとわからないまま書き進めているとまた音がします。まさか本田先生が来たんじゃあるまいなとよく見てみると、米粒大の小さな青い虫が止まっていました。犯人はわかったものの、私にはやはり草木や虫を可愛がった本田先生が覗きに来たような気がしてなりません。

▼告別式で寮生の久米田智加子さんのつぶやいた言葉「本田先生はお空のお掃除しに行った……」そんな姿が見えるようです。